

# 「インディアンの女王」

ジョン・ドライデン 作  
千葉孝夫 訳

## 三幕一場

ゼムポアーラ、トラクサーラに付添われ、奴隷達に担がせた王座に意気揚々と就いて、登場。インディアン達は、勝利を祝う態にて、戦の踊りを踊りながら進み出る。その勝利祝賀の最中に、アカーシスとモンテズーマ、彼等と偶々行き会う。ゼムポアーラ、その勝利の王座から降りて来て、アカーシスとモンテズーマとは、彼女の前に連れて来られる。

ゼムポ 我が血筋を辱め、自分の血筋をも裏切る者よ、  
恥辱を受けるべく生れつき、王座に就くことも出来ぬ者よ、  
お前は羨望の目ざしで私の勝利を見てきたのか？

さもなけりや、お前の母が女王の地位に就いているのが理解出来なかつたのか？

私にもまして、お前は他所者よそを気に入ることが出来るのか？  
アカー 私の孝順の義務に道を踏み誤ませたのは、私の名誉面目めんぼくだったのですぞ。

彼の捕虜達が無理やり連れ去られるのを、私は見るに忍びませんでした、  
何しろ、私が命を救われ、貴女が勝利を博したのは、彼のお蔭かげなのですからね。

ゼムポ あの若者が、あれ程高名な武人なの？  
モンテ そうです、貴女の部下に三度みつたびその地歩を喪わせた、その者ですぞ。

さあ、このモンテズーマの身を縛する鉄鎖を見て、お嗤わらいな

さるがいい。ですが、ご承知下さい、彼の剛勇が、彼をそんな風に取扱える力をば、貴女に与えたのですぞ。

トラク たえそうだとしても、彼の功績は一体何処にあるのでしょうか、

我が方の勝利ではなく、己が復讐を遂げようとした彼の功績は？

あなたの激しい憤りのお蔭で、我々は一体何が手に入ったのでしょうか、

その憤りの所為で、以前に負った傷を癒してくれただけ、ということ以上には？

それじゃ、死ぬがいい、何しろ、あなたが生きている間は、戦が終わる見込みはないからな。

あなたは勝利を齎してくれるかも知れないが、決して平和を齎してはくれないからな。

漆黒の嵐宛らに、あなたは我々全ての回りで吹き荒んでおり、

あなたが倒れる迄も、他ならぬあなた自身に対してさえも、荒れ狂っているのだ（彼を殺そうと、剣を引抜く）

アカー 恩知らずな悪党め、控えろ。  
トラク 貴方は、彼を助けてはなり

アカー ませんぞ。  
それじゃ、私は、生きていく訳にはいかな。

我が子孫達は、自分達にはこんな恩知らずの祖先、乃至はこれ程悪虐な王子がいた、などとは決して伝えないだろうな。

ゼムポ お前達は二人共、余りにも大胆不敵過ぎて、願うことも、拒むことも出来ないのだね。

彼を生かすも殺すも、その運命は、専ら私がこの手中に握っているのよ。

お答えなさい、大胆不敵な他所者よ、一体何処から、こんな向う見ずな企てを実行しても大丈夫だ、という気持が湧き起ったものか、をね。

モンテ 先ず私に教えて下さい、一体如何して貴女は、敢て私

から無理やり私が自分で博した勝利の、この上無く美しい獲物を奪い取ってしまったのかをね。

ゼムポ （傍白）彼を殺せー待て、彼は死なねばならぬもの

か？ー一体何故彼を死なせるのか、一体如何して、こんな風に不思議な程にも、私の決心が

千々に分かれ乱れるようなことになるのだろうか？ー彼は鉄鎖で軀を縛られていても、命令を下せるのだろうか？

彼は一体如何するだろう、傲慢不遜な奴隷よ、もしも彼が自由の身で、私が鉄鎖に縛られていたとしたなら？

だけど、彼は縛られているのだろうか、おお、神々よ、でな

けりや、この私が自由の身なのだろうか？

これ程私の心をかき乱しているのは、恋なのだ、他ならぬ恋なのだわ。

何と、誇りと恋とが、二つに分かれた私の心を引裂いていることか！

それぞれを容れるには狭過ぎるけれど、その両方共に、丸々その全てを己がものと主張し、要求しているのだ。

(傍白) 後から入り込んだものとして、恋の方は、力づくでも追い出されなければならぬのだわ。

その捕虜達(將軍をも)連れて行き、それぞれ別々の牢獄に、その一若者と、この一ペルーの女性とを収容するのだー

トラク (傍白) 何と彼女は気づかわしげな様子だろう！

もつと知らなくちやいかん。

モンテ 美しい王女よ、一体何故私は

その優しさをば、我が運命の中に擲め込まなければいけないのでしょうか？

私は、もしも一人で耐えるのなら、我が死に勇敢にも立向うことが出来るでしょうが、否応無しに、我が宿命は、貴女の運命をも引張り込むに違いないのです。

この胸はあらゆる恐怖感に対する備えが出来ていますが、貴女のお姿が蔵しまつてある所、其処は傷つき易くなっているですな。

インカ 厚かましいお前の恋をさし控えるがよい、姫はそれ程

へり下ることは出来ず、依然としてお前には身分が高過ぎるのだからな。

ゼムボ 引退つて、彼方で私が言いつけた通りになさい。

モンテ 今日この日迄、私は一度も本当の惨めさを味わったことはありませんでしたぞ。

オレイ 貴方の悲しみの半ばは、このオレイジアに降りかかるのだ、とお考えになり、

何もかもご自分お一人で耐えられる程、無情にはおなりにならないで下さい。

卑怯者が持つている忍耐は、意気地のない、絶望的な惧れ心なのだけれど、

勇猛心の持主の場合には、自分達が耐え忍んでいるものを蔑む、ということになるのです。(インカ王、モンテズーマ、オレイジア、及びトラクサーラ、退場)

ゼムボ お前の顔に泛んだその表情は、一体如何な悲嘆なの？

アカー それは、この心が常に付けている悲しみの記章なのですぞ。

ゼムボ この前のお前の行動は、私に怒りを催させたけれど、母親としての愛情を、お前から奪うことは出来なかつたわ。

一体何故お前は悲嘆にくれる必要がありますか？  
一 悲嘆とは、滅多に花の盛りの若さと結びついて見られること  
二 はないものですわ。

碌にその知識もなかった場合には、悲しみを感ずることがありうるものでしょうか？

運命は、軽率な若者に、たつぷりと必要物を提供してくれるけれど、

栄知が、不倅せな老人を誤り導くのよ。

心労は、現在の権力と、身分地位との、お供の家来なだけ  
れど、

希望は自分自身に仕え、護衛している者の胸中にこそ、一番  
生き生きと抱かれているものです。

おお、もしも将来恵まれる筈の倅せの、確実な

見透しが充分にいたなら、この上ない幸運なのだ！

アカー 一体如何な歎びをば、帝国がこの私に齎してくれるこ  
とが出来ようか、私の偉大さは、

悉く貴女の罪のお蔭で得ていることが分つているとい  
うに？

ゼムボ お前のものは、歎びであつてもいいけれど、私の  
は、  
自分に下された罰でなければいけないのです。

アカー ああ、天国へ入りたい、というその望みが、私の許へ  
送られてきても無駄なのだ、もしも美<sup>うるわ</sup>しのオレイジア姫が生  
きてはいられないものなら。

ゼムボ 一体何故私が授けることの出来ないものを、お前は私  
に求めるのです？

彼女は犠牲にしなければいけないのですよ。以前にたてた誓

いによって、

私が、神々に捧げなければならぬ、と決っているものを、お  
前に授けることが出来るでしょうか？

アカー おお、誓い、云々、とはお申立てにならないで下さい。  
王座に在る者にとつて、神聖なものを

悉く蔑<sup>なげ</sup>ろにしていた、ということ、母上がお見せにならな  
かったら、と思いますな。

ゼムボ 私はうんとお前を愛しているので、惧れ心がずっと追  
いかけて来て、

その恐怖心が、今迄不幸だったものを、何もかも強調してい  
るのだけれど、

私は、お前の為なら—  
今一度自分が罪になることを行つて—しかも、悔まないでい  
ることが出来るでしょう、

たとえその為、私が恥辱と処罰とを受けなければならない  
としてもね。

アカー 母上は、あんなに多くの悪行を企てられながら、  
息子の私の為には、たった一つの善事をも果たされることが

出来ないのですか？

ゼムボ 我が王座を揺るがすべく、戦を起したような連中に  
側隠の情を見せることを、思慮分別は禁じているのです。

アカー 貴女は賢明でいらっしゃるから、私が正当な行いをす  
ることをお許し下さい。

思慮分別が敢てしようとはせぬことを、名誉面目は、是非共  
行わなければならないです。

我々が戦勝を収めたのは、あの他所者の剣の力のお蔭な  
で、

彼の捕虜達を彼に返してやるのが当然なのです。

私はオレイジア姫を愛しております。ですが、我が恋に

我が名誉面目を裏切らせるよりも、高潔なやり方ですぞ。

ゼムボ 名誉面目とは、若々しい血気の持主にあつて、

法外に立派なことを行いたい、という切望に過ぎないので  
す。

私達はそれを美德廉潔と呼んでいるのです、年の功で、その

欺瞞ぶりを発見出来るようになる迄は、

若者を支配する熱情に過ぎないものをね。

アカー 偉大なる行為が、始め彼女に愛情を起させたのです

が、

私は、それよりもっと偉大なことを行って、彼女の愛を取戻

したい、と思つたのです。

ゼムボ 依然として、私が拒まなければならない請願を口には

しないで。

オレイジアとその父親とは、二人共殺さなければならぬの

よ。

お退りなさい、お前の話はもう聞きたくはないわー

アカー

貴女は耳

を塞いでおられますなー

だが、母親は、聞こうとしないかも知れないが、天は、聞いて  
てくれませうぞ。

貴女同様に、私も誓いをたてますぞ、天に在す神々に

貴女が罪もない彼女の血を捧げられる時、私は自分の血を捧

げられる時、私は自分の血を捧げる、とね。(アカーシス、

退場)

ゼムボ 彼女は死ぬのだ、あの他所者の愛を味わい、

私の希望を何もかもぶち壊していた、倅せなああの恋敵がね。

もしも彼女が勝利を収めていたなら、母親を奪い、

息子を奴隷にする以上の、一体如何なことが、彼女に出来た

だろうか？

又、残酷という名が自分に付けられたのを聞いても、私はこ

の手を止める心算はないし、

愚鈍な後継ぎの君主達は、温和しく支配するがよい。

征服を事としていた先祖達は、既存の法律を見捨て、

新しい法律を作れるようになる前に、古いものを破つたの

だ。

私は愛する人を追いかけるべきならぬーだけど、一旦恋を

味わってしまったら、

始めにその恋心を起させた事への評価を貶しめるのだ。

だけど、渴した者と飢えた者とは、堪能するのを惧れはしな

いけれど、

いざ堪能したならば、それが過剰な故に、却って癒やされるのだ。

トラクサーラ、登場。

トラク (傍白) さあ、これから、一体如何な想いを彼女の心が

匿しているものか、見てやろう。

知恵が蔽い匿しているものを、恋が現わしてくれるからな。

女王様、捕虜達を処置しましたぞ。

ゼムボ 我等は―して、たけり狂う

我等の若い武人は、一体如何しているの？

彼は自分の鉄鎖を未だ辛棒強く支えているのかしら？

トラク 彼と王女はすな、女王様―

ゼムボ あの二人は顔を合わせた

の―？

トラク いいえ。ですが、一体何処からこの熱情の全ては生い

育ったものでしょうかな？

ゼムボ あれは間違いだったのよ。

トラク あの向う見ずな他所者は危険だ、と

分りましたぞ。して、もしも折良く殺さなかつたなら、

貴女の帝国をば、新たに戦の中に投げ込むことになりま

ぞ。

ゼムボ 有難う、私も考えてみましょう。

トラク それだけでございます

か？―

我が軍の面々は彼に逆上せ上っており、既に貴女を

残酷と呼んでおりますぞ。して、おそらく彼等は

力づくでも彼の鉄鎖を解き、僅か一日で彼に王冠を戴かせる

かも知れませんな。

ゼムボ 私が彼を虐待したからとて、既に彼等の

呪いを招いている、と仰有るのね。私はもつと彼を虐待すべ

きなのでしょうか？

トラク ですが、嘗て貴女は、彼の嘖々たる評判が、民衆の

目から見て、王子達の名声を蔽い匿すのではないか、と心配

していらつしやいましたな。

ゼムボ 時が経てば、私達は一体如何な進路をとれば一番いい

のか、が分るでしょう。

だけど、私達は神聖な誓言の実行を愚図愚図と遅らせないと

うにしましょう。

インカ王とその娘とは、二人共生かしてはおけませんわ。

トラク 当然のことながら、彼は戦で罰せられたのです。です

が、一体何故

王女は父王の非運を分かち合わなければならぬのでしょ

う？ 下手な口実ですな、

高貴な生れのせい、罪無き者迄も罪人にされてしまう、と

いうことはね。

130

125

120

140

135

ゼムボ だけど、私達は有毒な虻達を、若いうちに滅してしま  
いましょう、

彼等そのものの為というよりも、彼等が生れ出た、その親達  
の為にね。

トラク ああ、いいえ、彼等はその両親の為に死ぬ訳ではなく、  
彼等が親と分かち合っている、有毒な胤たねのせいなのですぞ。  
今一度彼女をご覧になり、然る後に彼女を死なせて下さい。  
もしもその王女の顔、乃至は人柄に、何処かほんの一ヶ所  
も、

残酷な仕打を加えてもいいような所が見つかったならばね。  
天には黒雲が泛ぶことがあるし、月には黒点があるのです。  
ですが、完璧な美貌は、専らそれだけで光り輝いているので  
すからな。

ゼムボ 美貌が貴女の心の中に惻隠の情を起させたのね。

トラク して、貴女は剛勇に対して、私と同じ位優しい気持ちに  
おなりですな。

今迄の手前の功労に対しても、少しは何か褒賞が与えられて  
も、罰は当りませんまい。

ですが、兎に角、悪いことは言わないから、私の言うことを  
お聞きなさいー

ゼムボ ええ、貴方ではなく、私自身の力でね。

トラク 王侯は神聖なものですぞ。

ゼムボ 成程、その通りですわ、彼等

が自由の身である限りはね。

だけど、一旦権力が喪われてしまったならば、彼等の尊厳神

聖はさようならだわ。

神々が崇敬を受けられるのは、他ならぬ権力の所せい為なのだ。

そして、抑制されぬ自由をものにする、下界に在る全ての

ものを正当化してしまうのです。

あなたは鉄面皮な叛逆者の口実を使っていますね。

彼等は、自分達の王侯が選ぶに違いないものの審判者になる

ことでしょう。

君主たる者の苛酷な運命よ、今は安全無事なのだ、とその臣

下達が教えてくれた

時を除いて、何時そうなるものか、知ることが許されては

いないとはね。

その時王侯は、公共の見世物の操り人形さなご宛らに、ぎごちなく

動き廻るだけで、

上の高い所に坐っている、支配しているように見えるだ

けなのだわ。(ゼムボアール、退場)

トラク 女王は彼を愛しているな、忽ちのうちに、あの新しい

客人は、

私をあの不実な女の胸から追い出してしまったのだ。

恋を節操貞節と縛りつけようとする人々は、

自分自身を束縛する契約を結ぶことになるのだが、彼の方は

自由気儘に放っておくのだ。

155

150

145

165

160

一体何という苛々とした、じれったい気持で、私は女王の不正不実に耐えていることだろう！

しかし、彼女が備えている、と自分が咎めだしていることを、自ら行っているのだからな。

だが、自分自身の主義主張に対する関心が、私に分らせてくれるのだ、

女王の場合には、不法不当になるが、私が行えば、正しいということになる、あの行為をな。(トラクサーラ、退場)

### 三幕二場

イスメロン、眠っている。ゼムポアーラ、登場。

ゼムポ おーい、イスメロン、イスメロン。

彼は身動きもしないわ。まあ、こんな気味の悪い庵室に、

優しい天恵を伴った、穏かな眠りが入り込めるものだろうか？

この私が、人間らしい心を収めた胸の中で、酷い苦痛を味わわなければならぬものだろうか、

一方、獣や怪物達は、その休息を味わっていられるというのに？

穏やかな、至福の眠りに浸っていれば、如何程の安らかさを彼等は味わえることだろう！

獅子達は咆哮するのを止め、蛇達はしゅっしゅつと音をたてなくなるだろう。

一方、この私は目覚めた仮でいるのだが――唯もう自分の苦痛悲嘆を歓迎する為にね。

さもなければ、もしも眠りが私の目に忍び寄ったならば、何か恐ろしい夢が、悩んでいるこの心を麻痺させ、

それが、自然にやって来るよりもっと疾く、非運を私の許に齎らすのだ。

惧れ心は、眠りが外側の部分にだけ取り憑いて、魂をその俎に放っておいた場合に、この上無く人を鬱ぎ込ませるのだ。

一体如何な羨望すべき倅せを、これ等の呪われた者共は味わっていることだろうか！

所有することに次いで、滅すことは歎びなのだ。

イスメロン、おーい、イスメロン、イスメロン。(足を踏み鳴らす)

イスメ 一体誰なのだ、これっきりの大声で激しく叫びたてるので、

私の休息をかき乱している者は？

ゼムポ

あんたが強力な業わざで

乱れ悩む心の熱情まじなに呪まじないをかけて、穏やかにすることが出来



るのでなければ、

丸つきり休息が味わえないか、今後ずっと味わえないに違いない女ですわ。

イスメ 一体如何して不平だらだらの氣持になれるのですか、神々が最近あれ程優しくしてくれたというのに？

ゼムホ 神々の羨望の念の混じった優しさをば、如何して私は味わえましょう、

彼等が折角倅せを恵んでくれながら、その効用を駄目にしてしまふとなつたらね。

イスメ 畏れ多い皇后様、貴女の悲嘆の原因を残らずお教え下さい、

もしも呪いまじなの術で癒せるものなら、早速樂になれる、とお思いになつて間違いありませんぞ。

ゼムホ 私は、祭壇の前で、巨大な獅子を綱ない合わせた糸で縛つて、索ないでいる、という夢を見たので

す。  
それ程か細い糸で縛つて、彼を抑えているとなると、私は震

えたのだけれど、  
それを救済しようとする力を持わせてはいなかつたので

す。  
私が惧れ戦おのっている最中に、一羽の鳩が

翼を羽搏はばかせて、天空から舞い降りて来て、  
獅子の所へ飛んで行き、相手を抱きしめる人の両腕みたく

20

に、

抱擁するように、彼の首の回りに翼を拡げた時、クークーと啼く鳩達が、自分達の愛情を優しく

表現する時に使う、人が囁くようなあの音をたてたのです。一方、我が目を驚かすものに、私は釘付けになつて、それ程

温和しい生物が、  
それ程獐猛な獣とびつたり和合しているのを見よう、と目を

瞠もつたのです。  
遂には、温和しい鳩は、その頭を背け、

嘴でチヨコチヨコ突つついて、細いその糸を切つてやろうとし、

それを早速断ち切つて、そのささやかな束縛からその獐猛強大な獣を解放してやつたのですが、

その獣は、その憤りを悉く私に振り向け、  
自分が自由になると共に、私の運命を齎したのです。

イスメ 畏れながら、皇后様、貴女が物語つて下さつたその不思議な幻は、

たつぷりと驚異を孕んでおり、それを説明するのに、  
神々の助けを借りずともいい程、宿命が一杯に盛り込まれて

おりますな。  
物淋しい夜の闇が、眠たげな丸天井にまつわり付き、

じくじくした蒸気が、眠りの領国を支配する  
神々の、ぼんやりした顔を浸ひしているような、その地下の境

30

25

35

40

45

50

域、

其処へとあらゆる有益な元素、水・火・風といった  
足疾はやくき使者達が赴くのです。

彼等がやって来た、元のその場所で行われている戦闘につい  
て、

又、如何にして彼等がどの人間の軀をも支配しているか、に  
ついて、説明する為ね。

又、様々なその混合、乃至はその相剋闘争から、

我等の生涯の風や嵐が起る、と知られていることもね。

それ故、眠りがその軀を征服したなら、心は、

己が運命について、不十分なながらも少しは知ることが出来る  
のです。

仄暗いその洞穴からその神々が早速姿を現わすでしょう。

たとえ如何な姿形をとつていようと、怖がらないで頂きたい  
のです。

**ゼムボ** お前が呼び出すことが出来るもので、はっと私を驚か  
せられるようなものは、何も無いのだ。

生きているものの姿は、この心を動揺させられるだけだわ。

**イスメ** 我々が日毎に犠牲を捧げている  
千の二倍の神々よ、

四大が不和軋轢の裡に宿っている

下界に、運命神と共に棲んでおり、

人間達が何を為すべく運命づけられているか、を見ている

神々よ、

眠りの神よ、現われ出でて、偉大なる

ゼムボアール女王に教えてあげておくれ、一体如何な不可

思議なる運命が、

女王様のご覧になった、気味の悪い幻に付き纏っているも  
のかをね。

**ゼムボ** あの霊達は何と愚図愚図していることか！ 彼等と呼

出して、現われ出させておくれ、

さもなければ、彼等に火を焚いて、犠牲を捧げるのは止めに  
するわよ。

**イスメ** 偉大なる皇后様！

お怒りに駆られるあまりに、我々が崇敬している神々に感情  
を害させ、

我々は懇願すべきなのに、虚しく脅しをかけるということは  
なさらないで下さい。

お坐りになっていて、黙った俣お待ち下さい！

手前が強力なる呪いをかけ終ります迄。

己が棲家となっている洞穴の中にいる

墓蛙の鳴き声にかけて、

人を死に到らせる毒に充ち、膨れ上った脇腹をし、

息切れしている、地上棲まいの墓蛙にかけて、

崖沿いをするすると滑り歩いている、

鶏冠とさかの付いた蝮の傲慢さにかけて、

65

60

55

80

75

70

擗猛にして、兇悪な人の顔貌にかけて、

お前の背中に乗ったしやれこうべにかけて

お前の腰の回りに、帯の代りに締められた、

振れ曲った蛇にかけて、

お前の胸、お前の両肩、お前の首筋を

飾っている、黄金のハート型の飾りにかけて、

眠たげなお前の館から現われ出で、

気に染まぬお前の目を開けておくれ、

眠っているお前の気持を鎮めるのが習いの、

泡立つ泉がその楽の音を奏し続けております間。

夢の神、たち現われる。

夢の神

露わにしてはならぬことを知ろうとする勿れ。

運命が最大限に匿されている場合にのみ、歡喜が流れ出るのだ。

余りにもお節介に過ぎる者は、自分の悲しみがより分るだろ

う、

もしも将来の運命をば、彼が予め知るようなことがあつたな

ら、

何しろ、そんな風に己が運命を知ることによって、

彼は丸つきり生きていることが出来ず、何時なりと死んでし

まいたくなるだろうからな。

85

然らば、一体誰が奴隸的束縛から解放されるのか、

誰が王冠を冠り、又、誰が血を流すのか、などと訊ねないで

欲しい。

誰しも、自分に割当てられた運命に従わなければならないの

だからな。

非運と不幸不運とは、余りにも素早くやって来るものだ。

私をもうこれ以上強力な呪いで悩ませないでくれ、

これ以上のことを教えるのは、運命神に禁じられている故に

な。(夢の神、姿を消す)

ゼムポ お待ちなさい、詐欺師め、明々白々たる真理をば、光

明みにたいに忌み嫌い、

お前自身が棲まいする、どんよりと鬱陶しい、夜の闇そつく

りの、曖昧な意味の言葉を使っているお前よ。

暴虐な神々よ、貴方がたは、折角難局から

救って下さった、人間達の魂を解放するのを拒まれるのです

か？

一体何故私達は、貴方がたの慈悲がある、と依然として信じ

なければいけないのでしょうか、

私達が悲嘆にくれても、貴方がたは、如何しても憫れみをか

けて下さることは出来ないというのに？

何しろ、貴方がたは、苛酷な掟に従って、自らを縛ってしま

われ、

貴方がたならぬあの連中こそ、今や神々となつてしまったの

95

100

90

105

110

ですからね。(憂いに沈んで、腰をおろす)

イスメ (傍白) 女王は、憤りと心労とに押し拉がれて、項垂れ  
ているな。

空中に棲まいする精霊達よ、

お前達の楽の音という、強力な呪いの全てを挙げて、女王の  
魂をば、その調和ある本来の状態に戻してくれるよう、努め  
ておくれ。

空中を飛翔する精霊達が唄うものと想像されている唄。

下界の大地に縛りつけられている、哀れな人間達は、

恋や心労で押し拉がれてしまうが、

空中に棲まいする我々は、

そんな耐え難い感情を知ることが決して無いのだ。

然らば、一体何故人間達は、

光り輝く魂を蔽い匿している、

あの陰気な雲とも言うべき血気から

解放されることを嫌がるのだろうか？

すれば、彼等はけざやかに輝き、又、

我々同様に軽やかだ、と見えるだろう、

心労を伴ったその肉体を離れて、

我々の許へ、中空へすると滑り昇って行ったなら。

130

ゼムポ そんな下らぬことなどくたばってしまいがいい。お前

の術では、

心に湧き起る熱情を和らげる方法を、何か見つけることは出

来ないの？

さもなければ、たとえお前が、恋する者に安息を与えること

は出来なくとも、

悔り蔑んでいる者の胸の中に、無理やりにでも恋を入り込

せることは出来るの？

イスメ 熱情をより低く抑えることが出来るのは、理性だけな  
のです。

135

私の術は、新しい熱情を起させることはありませぬが、古い  
熱情を増進させるかも知れませぬ。

又、既に他の情炎がとり憑いている、

何人の胸の中に芽生えた恋をも、変えることは出来ないの

す。

ゼムポ もしもそれだけが、お前の取るに足らぬ術で出来るこ

とだとしたなら、

私は、お前の神々とお前とを、共に支配する運命神になり

しよう。

灼き滅ぼさねばならぬからには、恋以外の炎をも燃え

せ、

彼等の寺院をば、残らず灰燼に帰せしめてやりましょう。

イスメ 偉大なる女王よ――

140

ゼムボ

もしもお前がああ宣告を引伸ばしたい、と思つたのだつたら、

神々としての、彼等の力を早速召集して、お前の救援に役立つるがよい。

そして、恋の炎を赤の他人の胸中に伝えられるような、呪文を直ちに結んで欲しいものだわ。

それは、捕虜になつてゐる他所者で、その剣と目が打ちおろされると、それが何処だろうと、早速勝利にぶつかるといふ他所者なのよ。

私を想うあまりに、彼を私と同じ情炎で燃え上らせなさい。そうすれば、

犠牲は血を流し、ご馳走を供えた祭壇は光り輝きましよう。もしもそうでなければ――

お前達の寺院は崩れ落ち、お前達の神々にも、自分達の神力が殆んど役に立たぬ、と分るだろう。(一同、退場)

150

#### 四幕一場

幕が開くと、牢獄内でモンテズーマが眠つてゐるのが見える。トラクサーラ、オレイジアを導いて、登場。

トラク さあ、選択をして、生きるかと、死ぬかと、何れなりと

彼にお言いつけ下さい。

両者に惻隱の情、乃至は残酷な仕打をお見せ下さい。宣告を下さなければならぬのは、貴女なのです、私は実行

するだけですからな。

貴方の宣告の方が、私の申し立てより残酷なのですぞ、オレイ 近づいて来る宿命にこれ程温和しく従つてゐる、

この心をかき乱すとは、貴方は残酷この上無い方ですのね。

トラク 私の熱情に報いて下さい。そうすれば、貴女には忽ち証明出来るでしょう。

私が敢て愛してゐるものを、敢て犠牲に出来る者は誰もいない、ということがね。

次いで、あなたに話すが、見知らぬ人よ、目を覚し、これからはもう、大胆にも

私が愛してゐる女性を、あなたも愛してゐる、という振りをするにはお止めなさい。

さもなければ、この重大な時あなたには分るだろう――

モンテ 死を下すがよい、愚かな者よ。そうすれば、あなたは正当で、親切にもなれるだろう。

オレイジアを愛したのだが、彼女が沈んでゆくような嵐を湧き起したのは、私だつたのだ。一体何故あなたは、じ

つと見詰めていたり、

さもなければ、私が妨げるどころか、扇動したい、とさえ思つ

10

5

ている、

あの正当な一撃を、あんたが手ずから下すのを差し控えているのかね？

私が死んでしまったなら、オレイジアは私を赦してくれるかも知れないが、

もしも私が、敢て生きたい、と願ったなら、彼女は決して赦してはくれまいな。

**オレイ** 待って、お待ちになってーおお、モンテズーマ様、貴方はそれ程

ご自分のことも、更にそれ以上に私のことをも、無頓着になれるものでしょうか？

貴方の所為でこんな不幸を味わうようになってしまったけれど、

貴方がお亡くなりになるのを見ていることは出来ない、と、恥ずかしながら、申上げなければなりませんわ。

**モンテ** 私に近づいて来る宿命は、それ程の側隠の情を催させることが出来るものか？

神々も貴女も、人の罪咎を赦すことも、愛することも出来るのですな。

**トラク** 他愛もない愚か者、死に急ぐのを妨げない為に、私があんたに貸し与えてやった、あの僅かな息を、こう迄も

無駄使いしているのだからな。  
彼女には、不倖せになったからとて、あんたに感謝させるが

15

いい。

して、あんたは、自分の非運を招いてくれたとて、彼女に感謝するがいいのだ。

あんた達は、夫々お互いに、相手にとって自分自身の宿命である、と分ればいいのだ。

ゼムボアラ、急いで登場し、オレイジアの胸に短剣を突きつける。

**ゼムボ** お待ち、お待ちなさい、トラクサーラ、さもなけりや、

オレイジアは死ぬわよ。  
おお、貴方を待たせているのは、オレイジアという名前なの？

貴方が従っているのは、私ではなく、彼女の大きな力なのよ。

不人情で冷酷な奴、私が有罪の判決を  
未だ下してもいないその人を、お前は敢て殺そう、つて言うの？

**トラク** 貴女がお持ちの権力の全てを貴女に差上げたその者は、

敢て間違はなく奴隷を処刑しても宜しいでしょうし、  
又、貴女が他愛なくも燃えたさせようとされた情炎をば、消し鎮めても宜しうございましょうな。

25

35

20

30

何しろ、それは、この都を灰燼に帰せしめましょうし、この国は、貴女の疚しい情熱故に、喪われてしまうのですからな。

力を尽した手前に対してもそうなりますが、貴女のお国に対しては、この上無く恩知らず、ということになります。ですが、この者が神に捧げる彼等の犠牲ということになり、手前がその儀式を司る司祭という訳ですな。

ゼムボ (傍白) お前が負わせた傷を、私は彼女の胸になぞつてやりましょう。

打ちおろすがいい、すれば、私は此処に血の吹出る泉を開け、それは、真紅の湖に流れ込む、新たな川を付け加えることだろう。

(傍白) 何と、蒼白い彼の顔が、ひたと彼女に注がれていることだろう— そうなのだ。

おお、驚愕が、貴方の心に芽生えたの？  
何と、貴方のおおつびらな恋心は、オレイジアに注がれるようになつたの？

貴方への私の恋を承知していながら、自分の恋を匿すことは出来ない、つて言うの？

もしも私が始めに一撃を下したなら、彼女が血を流すのを見て、はつきりと、

貴方の心に悲嘆を惹き起させないものでしょうか？

トラク (傍白) 彼女は私の恋情を嘲弄しているな。キラキラと

輝く彼女の目には、

死と、みっしり匿された憤怒とが宿っているのだ。

(傍白) 敢てこのように彼女を信頼することは出来んな、— もしも彼女が如何しても死ななければならぬとしたなら、愛している彼心の命に到る途は、私の命を通つて、通じているに違いない、(彼が、彼女を避けて、オレイジアの前に立つと、彼女はモンテズーマの前に駆けて行く)

ゼムボ そして、この他所者の非運を目論む者は、私の心臓を通つて、彼の心臓に到る路を、力づくでも切り拓かなければいけないのよ。

トラク 美しのオレイジア姫は、未だに少しも惻隱の情を受けるとは出来ないのか？

彼女が、自分自身を保護してくれた者の命を救うのは、当然のことなのだ。

ゼムボ モンテズーマ殿は、自分の命を救い、愛している、と申し出たその女性に対して、それ程迄にも恩知らずになれるものなの？

オレイ モンテズーマ様は生きていて、他の人には正当な仕打をすることが出来るのに、この私には不当な仕打が出来るものですか？

貴方は恩知らずになる必要はありません。彼女が貴方に命を授けることが出来るものでしょうか、もしも貴方が生きることが拒んだなら？

私の恋心をお赦し下さい、私はむしろ貴方が  
亡くなったのを見たいものですわ、私以外の誰にでも優しく  
なさっているのを見る位ならね。

65

モンテ おお、愛するオレイジア！

一体何という知識を新たに授けられ、歓喜を覚えるようにな  
ったことか？

苛酷な死の教訓が、女性の手で授けられるものだろうか？

我が非運の蔑み方を、私は常に心得ていたのです。

70

だが、今迄一度も、敢て死ぬことと、貴女のことを一時に考  
えるなんて出来ませんでしたぞ。

しかし、貴女がこれ程心の広い嫉妬を教えてくださいましたからに  
は、

私は、貴女に生きていて欲しい、と敢て願うことは出来ませ

んな、もしも私が必ず死ななければならぬものならばね。

一体如何程貴女の恋は、私の勇気を凌いでいることではし  
ょう！

勇気だけでは、貴女が血を流されるのを見たならば、縮み上

るでしょうからな。

75

ゼムボ 恩知らずの他所者よ、お前はオレイジアを見詰めて、  
自分の目を楽しませているがよい、彼女が死ぬ迄の間ね。

私は、自分がたてた誓いは守るわー私の下す復讐が

私の敬虔信心を証明してくれるのだ、と分ると、少しは喜び  
が覚えられるわ。

トラク それでは、二人共生かしてはおけませんな。我々は、  
個人的な感情に急ぎたてられて、

80

公共の利益になることを実行するのを、余りにも長い間愚図

愚図と遅らせていましたからな。

ゼムボ (傍白) 確かに彼は空恍惚しているに違いないけれど、新  
たに

野心満々の恋をしているからには、多分私を破滅させる者と

分るだろう。

この他所者が親切でさえあつたなら、私は彼の術に逆らい、  
我が心を与えたその相手に、我が帝国をも授けるだろう。

85

だけど、恩知らずの者よ、

お前の破滅が近づいているのだから、お前は賢明になつても

いい筈だわね。

モンテ あんたと、あんたの恋と、あんたの加える危害など、

馬鹿らしくして眼中にはありませんぞ。

ゼムボ (傍白) 一体如何したらいいのだろう？ーこれから未だ

何かの方法を試してみなければならぬわ。

恋の激情に操られる女は、一体如何な理由が持出せるのだろ  
う。

90

トラク (傍白) 何か腹黒い計略が企まれてるな。不実不正

な者の目は、

忽ちのうちに、他人の裏切りが見透せるものなのだ。

ゼムボ 無分別な他所者よ、こう迄自分自身の非運を引摺りお



ろすとは！

モンテ 貴女も、貴女が助けて下さる、と仰有っている、その命を頂くのも真<sup>ま</sup>つ平<sup>びら</sup>ご免ですぞ。

獄吏、登場。

ゼムボ ほら、看守、―お受取りなさい― 一体如何<sup>どん</sup>な名で彼を呼ばなければいけないものかしら？

奴隸―奴隸か―(傍白) それじゃ、この私は、奴隸の捕虜にならなければならぬ！

モンテ 一体何故お前は、解放されて自由になるのがそれ程厭なの？  
我が身を縛るこの鉄鎖とあなたから、死が私を解放してくれるでしょうな。

ゼムボ ほら、看守、この怪物を私の目の前から連れて行つておくれ。

そして、何時も夜の闇が支配しているような所に奴を留め置くのよ。

誰も奴に近づかせぬように。もしも近づかせたなら、怠慢の罪を犯した代価は、お前の命で支払うことになるものと思うがいい。

モンテ 私は、あなたの憫れみも、残酷な仕打も馬鹿らしく思っているし、

あなたが授けてくれる俸せなぞ、阿呆らしくて、眼中にはな

いでしような。

ゼムボ おお、ぞつとする程厭な奴！ 此奴を連れて行きなさい。

私の憤りは、塞き止められた流れみたいに、何かに喰い止められて、河水が膨れ上っているので、

こんな風に抵抗され、妨害を受けると、新たな力が加わって、スイスイと流れている、元のその水路の境界を超えてしまうのだ。(看守とモンテズーマ、退場)

さあ、愛するトラクサーラ、私達二人は互いに赦し合い、これから、あの恥知らずの非運を分かち合つて、生きることに行きましょう。

祭壇は葬儀用の木の太枝で飾りたて、

贖罪の供物を捧げ―そわそわとした気持で誓いを口にしてね。(ゼムボアーラとトラクサーラ、退場)

オレイ 一体如何<sup>どん</sup>な風に物事は定められているのだろう、悪人の方が、

一見善人よりも親切で、優しく見えるなんて！

彼女は、激情のお蔭で、実際よりもっと優しいのだ、と証明されているように見えるし、

この私は、恋心が過剰過ぎる故、残酷に見えるのだわ。

彼女は彼を愛していて、彼が死ぬのを防ぎたがっている。だけれど、彼のことを

もっと深く愛しているこの私は、彼が死なないのでは、と惧

100

95

115

110

105

れているのだ。

我が愛情と同じ位不死不滅の我が嫉妬心は、

私が地上にいる俣で、下界の我が墓から安息を

奪ってしまうだろう、—神々よ、たとえ私が啣つことがあつ

ても、お赦し下さい。

貴方がたは、私を安らかに死なしてくれることも、生かして

下さることもなさらないのですからね。

アカーシス、看守、及びインディアン一名、登場。

看守 お二人は今し方お出でになったばかりですぞ、閣下。

アカー それは結構、正当なる我が企てに誠実に従ってください。

すれば、お前に命令を下す王子の好運は、悉くお前のものと

なるぞ。(アカーシス、退場)

インデ このことは皇后様にお知らせ致しませんとね。(退場)

オレイ これは一体何を意味しているのだろう！—

あれはアカーシス王子様だった。もしも私が自分の視力を敢

て

信ずることが出来たなら。だけど、悲しみは、歎びと同様、

人の目を欺くことがありうるのだ。

一つ一つの物が、その物本来の姿とは違ったように見えるの

だ、

直接目に見えるのではなく、涙を泛べた目を通して見たなら

ば。

アカーシス、モンテズーマを連れて、再び登場。

まあ！—

アカー (モンテズーマに彼の剣を渡しながら) ほら、もう一

度これを佩びて下さい。さあ、私について来て頂きたい。

モンテ 成程、大変結構。—

(傍白) 私には敢て考えることは出来ぬ、何しろ、間違つた推測をするかも知れぬからな。

この人を信頼して、私が一身を委ねている限り、誰も私を欺くことは出来ないのだ。(一同、退場)

#### 四幕二場

抜身の剣を持った二人のインディアンに導かれて、オレ

イジア、登場。モンテズーマ、及びアカーシス、別のイ

ンディアンに囁きながら、登場。

アカー お前の誠実さを私が如何程重んじているか、を考えて

みるがいい。

130

125

120

135

インデ 今迄一度も、手前がこれ程不承不承に従ったことはありませんでしたぞ。

アカー 先ず第一に、モンテズーマ殿、自由にされるがよい。

あなたは、私に自由を授けて下さったこと故、ここに、私は、あなたを解放して、自由にして差し上げますぞ。

我々は、今や同等になったのですぞ。お姫様、犇々と敵に追跡される

危険が大ですな。貴女の撤退を好都合にする為、

我々二人に、暫しの間後方に留ることを

お許し下さい。一方、貴女は、そつと静かに平原上をお出で下さい。

オレイ 何故私が行かなければなりませんの？ 貴方は如何なお心算なのです？

我が父上は、何故此処におられるのでしょうか？ 一体何処へ私は送られるのでしょうか？

アカー 貴女の疑惑は直きに解けましょう。この方を案内して行つてくれ。(オレイジア、インディアン達と共に退場)

そこで、モンテズーマ殿、今や我々は二人つきりになりましたぞ。

名誉面目に関して、私が貴方に借りていたものは、もうお返ししましたぞ。

名誉面目同様、恋にも人は従わなければならないのです。あなたの捕虜としてのオレイジアは、解放して自由にしてあ

げますが、

私の想い人としては、あなたの許から戻るように、と求めますぞ。

モンテ あなたは、するように、と名誉面目に言いつけられたことを果されましたな。

しかし、するように、と名誉面目に忠告されたことを、友情が妨げているのです、

友人同士は、争い闘つてはならぬものですからな。

アカー がお互いに友情を抱き合っている、と公言するのなら、

お互いに、相手の伴せを確と護り合ひましょう。

我々二人のうち一人は、是非なく死なねばならないのだが、

その者は彼女の想い出に残るといふ点で、

伴せだと分るだろう。もう一人は、彼女に愛されるといふ点

でね。

私の護衛兵達はいく近くで待つていたので、もしも私が失敗

したなら、彼等は如何しても

オレイジア姫をあなたに渡さなければならぬ、さもなくば、

自分達への信任を裏切ることになるからね。

モンテ 仮にあなたが勝つたとしたら、あなたの広濶な王国

と、ペルーとを分け隔てている、

南海の砂浜か、荒波の打寄せる北洋の海岸をあなたは彷徨い歩き、

そして、ご自分の帝国を出て、望みなき恋を追い求められる  
お心算ですか？

アカー 私の行動全てのうちで、その何れによってあなたは推  
測出来るものかな、

あなたの功績の方が勝っているが、私の愛情の方があなたの  
より尠い、と？

一体如何な獲物をオレイジアが手にするのを、この帝国は大  
目に見てやれますかな？

さもなくば、恋が胸を充している場合には、恐怖を抱く如何  
な余地があるのですかな？

モンテ それでは、美しのオレイジアに宣告を下して貰いまし  
よう、

さもなくば、生きていて欲しい、と彼女が願っている、その  
者が死ぬことになるかも知れませんか？

アカー あなたの功績の方が勝っているので、彼女をあなたの  
側に誘い込むでしょうな。

あなたよりも無力な私の肩書は、武力によって試さなければ  
なりませんからな。

モンテ おお、暴虐な恋よ、あなたの掟は何と残酷なことだろ  
う！

私は友情を喪失しなければならないのだ、さもなくば、あん  
たの主義主張を裏切らなければなりませんな。

全世界を敵に廻しても、私が擁護してあげたい人、

その人は、私の手によって斃れなければならないのですから  
な。

アカー 我々二人が命を全うしているのは、お互いの友情のお  
蔭なのです。

しかし、友情が授けてくれたものをば、恋が取消しているの  
ですな。

恋にはそれなりの残酷さがあるが、友情にはそれが無いので  
す。

ところで、自分達には係わりのない理由で、我々は闘うこと  
になるのですな。(二人、闘う。アカーシス、傷つく)

オレイジア、インディアン達を伴って登場。

オレイ あれは一体何の音でしょう？

待って、お待ちなさい、一体如何な大きな理由があつて、  
これ程激しい憎しみを催させるのでしょうか？

モンテ それは、我々  
の激烈な恋だったのですぞ。――

アカー 私が貴女を解放して、自由にして差上げ、自由にして  
あげたことよって、

貴女の赦しを買い取った恋だったのです。  
それを果たしたとなると、オレイジア姫の為に、モンテズー

マ殿相手に闘つても、

35

30

45

50

それ程不法不当なことはない筈だ、と私は思ったのです。

その闘いでは、彼が勝ちましたが、今や私は告白せぬ訳には  
いかないのです、

それは、彼の好運の方がより強かったからで、私の熱情がよ  
り勝ったからではない、とね。

しかし、あんな達は報い合うことは出来ないのだ、彼の剣が、  
しっかりと愛する人を抱きしめている、死にかけた恋敵を取  
除いてしまう迄はね。

オレイ 一体誰が倒れるにしても、それは依然として私の保護  
者であり、

そうすると、死ぬことも、殺すことに劣らず大きな罪になる  
のですわ。

アカーシス様、望みのない恋を追い求めることはなさらず、  
生き延びて、その軽い病を癒されて下さい。

アカー 貴女は私に生き延びろ、と仰有りましたが、しかも、  
死ね、と命じておられるのですぞ。

私は貴女のお心遣いを受けるには価しいのです。遁げるの  
です、お姫様、お逃げなさい。

一方、この私は此処に、この平原上に憫れられることもなく  
倒れ伏し、

敵の追跡を受けることもなく、怪もない山の中に到達出来る  
のです。

それに、この連中に命令を下しますぞ――

この連中は、自分達の友情が本物なのだ、と私に考えさせた  
いので、

私を一人放っておいて下さい、貴女に仕え、後を追って行く  
為にね。

お急ぎ下さい、美しの王女様、不倅せぬ貴女の  
お父上に伴っている、あの非運を避ける為にね。

オレイ それでは、父上は死ぬに任され、死にもしないうちに、  
娘の私に見捨てられたのが分る、ということになるのでしょ  
うか？（行きかける）

モンテ 一体如何したい、と仰有るのです？――

オレイ 行き、 牢獄へと戻って

手枷足枷を付けられ、父と手を取り合って、悲嘆にくれるこ  
とですわ。

モンテ それではお父上の命を救うことにはならぬし、貴女の  
命をも投げ捨てることになりませぬぞ。

オレイ 孝順の義務が、造化が一度は支払わねばならぬものを  
授けてくれましよう。

アカー 生命は、天と両親とが授けてくれる贈物なのですが、  
もしも貴女が生き延びられたなら、孝順の義務が、こよなく

力強くそれを保つてくれるでしょうな。  
オレイ 私は、唯もつと遠く迄我が源泉から飛んで遁げ、

水の流れ込まぬ小川みたいに流れ続けて、死ぬことでしょ

う。

もう私を急かさないで下さい。そして、貴方の名誉面目と、

私の敬虔とが肩を並べた、と知って、悲しみ嘆かないで下さい。(退場。何度も後を振り返りながら、静かに立去る)

モンテ もしも名誉面目が駄目でも、恥辱屈辱が行くべき道を示してください。

私はあの人と一緒に牢へ戻りませぬ。

アカー

マ殿、お待ち下さいよー

あなたの恋敵たるこの私は、あなたを一人で行かせる訳にはいきませんな。

たとえこの軀の血が流れ失せようとも、私の恋心は、私を許容してください。

二人が立去りかけた時、ゼムポアール、トラクサーラ、

彼女に告げ口に行ったインディアン、その他の者達、登場し、二人を捉える。

ゼムポ その者達を捉えなさいー

アカー

おお、モンテズーマ殿、あなたは、もう万事休す、なのですぞ。

モンテ もうこれ以上、誇り高い心情の持主よ、あなたの勇氣

85

を徒らに誇示しないで下さいよ。

不幸不運なる者の災禍たる勇氣よ、不運に遭遇することは出来るが、それに抗うことは出来ぬものよ！

ゼムポ アカーシスが血を流しているわ、ー

一体如何な残忍野蛮な者の手が、こう迄我が息子に傷を負わせたのでしょうか？

モンテ それは私でした。不倖せな我が劍によつて、それは行われたのです。

貴方は血を流しておられますな、お気の毒な王子よ。して、この私は、一人とり残されて、我が好敵手が

斃れたのを歎き悲しむことになるのですな。

トラク

王子様は血を流しておられるが、未だ生き延びられるかも知れませんな。

アカー 友情と恋とが、弱り衰えゆく我が体力を甦らせてくれるのだ。

私は貴方の為に生きるべきなのに、敢て死ぬことは出来ませんな。

私が死ぬことは、今や私が犯す罪悪ということになりますな。私が貴方を

解放して、自由にしてあげてから生きることが、私の罪ということになるようにね。

そういう訳で、依然として私は不幸不運の俣でいなければな

95

90

りませんな。

貴方が生きるも死ぬるも、均しく私の宿命になるのです。

オレイジア、戻って来る。

オレイ 又、轟音が聞えてくるわ。ああ、この目に一体何が映っていることだろう！

恋よ、お前は嘗て孝順にその地位を譲ったわね。

さあ、孝順よ、恋に今暫くの間勝誇らしてやっておくれ。

ほら、私の両手を縛って下さい。さあ、モンテズーマ様、運

命に向って

微笑みかけて下さい。貴方は私の為に悩み苦しんでいらつし

やいますので、

このオレイジアは、自分でも捕囚としての鉄鎖を貴方と分か

ち合いますわ。

モンテ さあ、運命よ、如何な酷いことでもするがいい。

ゼムボ 神殿へ

と真直ぐに連れて行け。

司祭と祭壇とが、この恋人達を待ちうけているわ。

この二人は一緒にしてやるわ、是非共ね。

トラク ば、  
して、復讐を果せ

覚えることの出来るあの歎びを、私は経験する心算ですぞ、

それは、恋をしても覚えられないものですがな。

アカー 私はあんたの血への渴望を鎮め、我と我が身を

滅す心算ですが、我が身と共に、残酷なあんたの歎びをもね。

さあ、モンテズーマ殿、オレイジア姫が死なねばならぬから

には、

最初の犠牲者として、私があんたよりも前に死にましよう。

彼女が死ねば、私の資格はあんたのを凌ぐことになりま

な、

彼女が生きていた時、あんたの希望期待が私のを凌いでいた

のと同じ位にね。

して、我々の血が混ざり合って、祭壇を染めた時、

その時こそ、我々の新しい資格をば、神々に決めて貰いま

ようぞ。(一同、退場)

## 解題

一六六三年ジョン・ドライデンは(ロバート・ハワードと共作で)悲劇「インディアンの女王」を書き、翌一六六四年一月王立劇場で上演されたが、ヘンリー・パーセル作の伴奏が付き、豪華を極めた衣裳も見せ、素晴らしい演出効果で大喝采を博した。筋は、メキシコの將軍モンテズーマの悲劇を取扱ったものプロットで、台詞は全部二行ずつ押韻しており、大部分が「ヘロイック・カプレット」(heroic couplet、英雄の恋愛と武勇とを中心に描い

た英雄悲劇で見られる『英雄対韻句』になっている。

この成功に元気づけられたドライデンは、勇躍、この劇の続篇「インディアンの皇帝」、「暴虐の恋、又は、殉教の王女」、「グラナダ征服」、「オーラン・ジープ」という具合に、次々と英雄悲劇の傑作群の制作へと歩を進めることになるのだ。